慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	A・カミュ『転落』読解ノート(II)
Sub Title	Notes sur une lecture de la Chute d'Albert Camus (II)
Author	白井, 浩司(Shirai, Koji)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1990
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.58, (1990. 11) ,p.317(72)- 331(58)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	慶應義塾大学部文学科開設百年記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00580001-0331

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

A・カミュ『転落』読解ノート（Ⅱ）

白　井　浩　司

まえがき

1956年に刊行された，レシ（物語）と作者の呼ぶ『転落』が，4年前に起きたサルトルとの論争に深い影響を受けていることは，Roger Quillot を初め多くの研究者が認めているところである。サルトルとの論争は，サルトルの弟子筋にあたる Francis Jeanson が，〈現代〉誌1952年5月号に寄稿したカミュの評論『反抗的人間』の書評に端を発する。小説『ペスト』のほとんど誤読と言える部分を含むこの書評に不快を感じたカミュは，〈現代〉誌編集長サルトル宛に詰問調の手紙を送ったが，これに対するサルトルの返書とともに，〈現代〉誌1952年8月号に掲載された。さらにジャンソンの再批判である「すべてをぶちまければ……」も同誌に載った。激烈な人身攻撃と言うべきジャンソンの再批判は特に，カミュを深く傷つけたはずである。ジャンソンはカミュを傲岸不遜の人物と看做し，義人を気取っていると揶揄している。カミュがこのようないわれなき非難に，真正面から答えなかったのは賢明だった。カミュは『転落』によってサルトルとジャンソンの批判に答えたのだが，その答え方がいかに巧妙を極めたか，以下に詳述する。すでに20年前に Warren Tucker がこの問題を取上げているから，二番煎じの感を免れ難いが，サルトルやジャンソンの論文に対応して書かれた文章が『転落』のなかにいかに多いかを知ったのが，拙文の執筆の動機である。

そもそもカミュがサルトル及びサルトル一派と対立するに至ったのは，革命思想を信ずるか否かの一点による。サルトルとそのファミリーは，革

命を美化し，革命を成就した国々を無条件に支持し，讃美した。ソ連，中国，キューバ，そして北朝鮮にアルジェリア。それらの国々で行なわれる粛清，収容所送りは，あるいは見まいとし，あるいは必要悪として容認する。ところがカミュは，革命に伴う殺人を真向から否定する。従って，フランス大革命もロシア革命も否定されるのだから，サルトルたちと衝突したのは無理もない。このようなカミュの態度は，いまならば大方の支持を得るだろうが，1952年当時はフランスの文壇も論壇もカミュに同情的ではなかった。その悲痛な心境が『転落』の底を流れている。

なお，各項目の終りに記入した数字は，フォリオ版（改訂版）『転落』の頁数であり，SまたはJのあとの数字は，現代誌に掲載されたサルトル，あるいはジャンソンの論文の頁数である。

『転落』読解ノートの（I）にあたる文章は，番号をつけずに，京都外国語大学の〈研究論叢〉33号に掲載した。論旨は異なるが，内容の重なる部分があるのをお断りしておく。

(1)「あゝ，わたしが接続法半過去を使ったことがお気に障ったようですね。白状しますと，接続法半過去とか，一般に凝った言いまわしに弱いんです。こんなことじゃだめだよ，って自分に言いきかせているんですけれどもね，ほんとうですとも。高級肌着類を好んで身につける人が，必しも足が汚いとは限りませんものね。それでもやっぱり，ポプリンみたいに立派な文章は，湿疹を隠していることがとても多いんです。しどろもどろになって弁解する奴らだって，結局のところ，清潔というわけじゃない，と思って自分を慰めてはいるんですよ。」(9, 10)

語り手であるジャン＝バチスト・クラマンスのこの言葉は，ジャンソンのつぎの評語に触発されたのではあるまいか。ジャンソンは言っている。

「彼の本（『反抗的人間』）では，スタイルのことを考えすぎている，と言えないだろうか。」「われわれは，カミュの抗議が美しすぎるのを残念に思わないだろうか。あまりにも美しすぎ，見事であり，自信過剰であって

自己満足が甚しい。いずれも，完璧で純粋なきまり文句が，飽きもせず，数珠つなぎになって，つぎからつぎへとでてくるのを見たまえ。」(J. 2071-2072)

さらにジャンソンは，カミュの小説『ペスト』に触れ，つぎのように言う。

「『ペスト』は，状況の外にいる主体によって高所から眺められた諸事件を語ったものである。しかもその主体自身は諸事件を体験せず，眺めていただけである。」(J. 2072)「高所から眺める者にとって，地べたを這いまわる人間たちのうごめきは，かなり空しいもののように見えるおそれがある。」(J. 2073-2074)

『ペスト』は，ペストに襲われた都市において決死の防疫活動に従事する医師リウーの記録という形をとった小説である。リウーは「状況の外」にいるのでもなければ，諸事件を高所から眺めているのでもない。ペストに感染する危険を冒しながら，診察を続けていたのだ。この事からだけでも，カミュがジャンソンを相手にしない，と考えたのは無理もない。

その上，「すべてをぶちまければ……」のなかでジャンソンは，誤読を男らしく認めようとはせず，つぎのように弁解している。

「ぼくは，『ペスト』の作中人物の行動が，ただ傍観するだけだ，などと主張した覚えはまったくない。ただ彼らが，自分たちの行為とその諸条件に対して，記録者の観点を取るや否や，自分たちの行為が空騒ぎの形でしか眼にはいらぬと言ったまでである。」(J. 355)

なんとも苦しい弁明であるが，ここでもまた間違いを犯している。記録をしたのはリウーひとりであるのに，複数の記録者がいるかのような書き方である。「しどろもどろになって弁解する奴ら」という表現が無から生じたとは考えられない。

(2)「わたしにはいつも，わが同郷のパリジャン諸君が，思想と姦淫の二つに夢中になっているように見えましたね。」(10)

話者は，パリジャン諸君と言うように一般化してはいるが，「思想」という言葉を使っている以上，パリの知識人を標的にしているにちがいな

い。しかも「姦淫」という言葉をならべれば，パリの知識人のなかで，サルトル以上にぴったり当てはまる人物は他にいないだろう。サルトルが，必然の恋としてボーヴォワールと別居結婚を続けたほかに，数多くの偶然の恋を持ったことはよく知られている。

(3)「それはそれとして，家族そろって一寸きざみに人殺しをする連中よりは，やくざのほうが道徳的だと思いますよ。」(11)

クラマンスが見聞するやくざの生態と，「一寸きざみに」，ピラニアのように人を殺す連中のやり方とを比較して，やくざのほうがむしろ道徳的だと言う。この文章で問題にされているのは「殺人」という行為である。やくざは，クラマンスの見るところ，匕首をふりまわしたり，ピストルをぶっ放したりするけれども人を殺したりはしない。むしろ，ピストルを撃ちつくすと，恐怖でへなへなになってしまう。

一方，ラーゲリ（強制収容所）に反対派をほうり込むスターリン主義者は，そこで反対派が少しづつ消耗してゆくのを黙視し，死なせてしまう。スターリン主義者は，このような人殺しをしていても少しも動じないが，それはラーゲリを合法的機関と考えているからである。「一寸きざみに人「殺しをする連中」とは，スターリン主義者を指すほかにないと思うが，家族水入らずで」，あるいは「家族同士で」という限定がつくから，これはサルトル・ファミリーを指すことになろう。〈現代〉誌1950年1月号の社説を読めば，また，論争時のサルトルの論文を読めば，彼がラーゲリを必要悪として認めていることがわかる。昨年来日したノーベル賞作家クロード・シモンは，私の質問に答えて，サルトルはスターリン主義者であると明言した。ボーヴォワールやジャンソンやメルロー＝ポンチーなど，世にサルトル・ファミリーと称せられる人々がサルトルと同じ政治的立場を共有していたことは言うまでもない。（メルローはのちに考えを変える。）共産（社会）主義国家におけるラーゲリの存在や粛清に早くから批判的だったカミュとサルトルとの確執の理由を考えてみれば，「家族そろって一寸きざみに人殺しをする連中」というのがなにを指すか明らかではないだろうか。

(4)「ここ（アムステルダム）にくる前は弁護士でした。」(12)

『異邦人』に登場する弁護士は，作者によって名前がつけられていない。予審判事や裁判官やカトリック司祭など，名前のない他の人物同様，彼が弁護士という社会的機能を果しているにすぎないことを示している。彼がムルソーの弁護に成功しないのは，無能であったからではない。どんなに優秀な弁護士でも成功は覚束ないと思われるほど，ムルソーの犯罪は特異なのだ。『転落』との関連で言えば，マイナスイメージしか与えない弁護士という職業をなぜえらんだか，という疑問である。その答えは簡単であって，サルトルの返書中につぎの文章がある。

「君は貧困の名において語っているが，貧者の弁護士なのか，それとも兄弟なのか，あるいは貧者の兄弟で弁護士なのか。（中略）君は貧しかったかもしれないが，もういまはちがう。君はジャンソンやぼくと同じようにブルジョワだ。（中略）〈彼らこそわが兄弟であります〉と言うことが，陪審員の涙を最も誘い易い文句であることを心得ている弁護士なのだ。」(S. 335-336)

カミュは，アルジェリア移民の極貧家庭に生れ，第一次大戦で父親が戦死すると，母親と三歳年長の兄とともに，アルジェの母方の祖母の三間しかないアパルトマンに転がりこんだ。電燈線も水道も通じていず，家族が文盲だったので一冊の本もなかった。カミュはすでに10歳のころから働きにでなければならなかった。

高名な作家となったカミュをサルトルはブルジョワと呼ぶ。この場合，ブルジョワという呼称が厳密な定義の下に使われているのではなく，単なる蔑称であることに注意。

(5)「あなたもみんなと同じですな。この善良な人たちが，組合の理事や商人たちの大集団で，幸いにも永遠の生命が得られるには，どれだけの費用がかかるかを勘定し，唯一の気晴しといったら，鍔ひろの帽子を冠って，解剖学の講義をときどき聴きに行くことだけなんだろう，と思っているんでしょう。」(17)

これを読めば，誰もがレンブラントの大作『トゥルプ博士の解剖学の講

義』を思い浮べるだろう。なぜレンブラントの絵なのか，これもサルトルとの論争に関係がある。サルトルは言っている。

「君はジャンソンの論文に，現代社会を蝕む悪の徴候を見てとって，彼を大教室での病理学の講義の材料にした。レンブラントの絵を見ている思いがする。君が外科医でジャンソンは屍体だ。君は，驚く参加者に傷口を指さしている。」(S. 335)

(6)「わたしは，寛大な人間だという評判でしたし，事実そうでした。人前でも私生活でも，施しをたくさんしたものです。（中略）与えることに非常なよろこびを感じていたものですから，それを強制されるのがとてもいやでした。金銭問題でこまかいのはうんざりでしたが，渋々そうしたこともありました。自分の裁量で施しをしないと気が済まなかったのです。」(26-27)

カミュは，若いときから金銭には恬淡だった。作家として大成したカミュに，恩師の Jean Grenier が邦貨にして500万円ほどの借金を申込んだとき，二つ返事でそれに応じたことがある。なおこのことは，カミュ—グルニエ往復書翰集によって知ったのだが，グルニエに対してなにか割り切れない感じを抱いた。独特の思索家でエッセイストのグルニエという人を，かなり脱俗的な人物のように考えていたのは間違いだったと思われないでもないが，金銭に対する彼我の感覚が違っているのかもしれないのである。それはとにかく上述の文章も，サルトルの執拗な非難と関係があろう。

「(カミュが貧者に共感を抱くのは）犠牲的精神からだろうか。だがそれもとぎれがちでは，プシコー夫人（19世紀の有名な慈善家）と施しものとの関係に似てくる。貧者たちの兄弟であるとあえて自称するには，生活の全瞬間を彼らに捧げる必要があるから，その意味で君は彼らの兄弟ではない。君の気遣いがいかに深くとも，それが君の唯一の動機ではない。断然君は，聖ヴァンサン・ド・ポールや，貧民救済婦人会の修道女たちにそっくりだ。」

サルトルは，聖ヴァンサン・ド・ポールや修道女たちが，自己救済とい

う不純な動機から貧民救済に乗りだした，と看，カミュがその同類だときめつけている。本気で貧民救済を行うのであれば，全身全霊をあげてこれに取組むべきだと主張する。

サルトルのこのリゴリズムについては検討の余地があるが，果してカミュが，「貧者たちの兄弟であるとあえて自称」したことがあったかどうかは疑問である。そんなことを吹聴するほど恩着せがましい人間ではなかった。無名の青年時代に，カビリー地方の悲惨な原住民の生活を報告したのは彼だった。『転落』の主人公は，カミュとは正反対に，己れの善行をひけらかす人物として提示されている。

(7)「そうです，わたしは高いところにいないと，どうしても気持が落着きませんでした。生活の些細な点に至るまで，上方にいることが必要でした。」(28)「反対に，海抜5,600メートルの，日光を燦々と浴びている海がまだ見える，見晴らしの効く場所にいると，最ものびのびと呼吸ができました。特に，たったひとりで蟻のような人間を見下ろしているときはなおさらでした。」(29)「そのとき私は大きくなります，いいですか，大きくなり，のびのびと呼吸をします，山頂にいるので眼下に平野が拡がっています。」(148-149)

以上のような語り手の上昇志向が，(1)で指摘したジャンソンの『ペスト』誤読を踏まえていることはたしかだが，「すべてをぶちまければ……」のなかでもジャンソンはつぎのように，カミュに悪態をついている。

「君の堂々たる孤独を捨ててくれたまえ。そして，いっとき我々のあいだに降りてくるために，君があまりにも早くから身に纏っている，あの大理石のように冷たい威厳を脱ぎすてて，もっと軽やかな服装を身につけてもらいたい。」(J. 359)「君は君の真理を，人間どものはるかな上方，高いところで，いろんな色を塗りたくった君の偉大な姿を前にして，たったひとりで思いついたのだ。」(J. 371)「君は一跳びで，まるで軽々と，他人への尊大な思いやりの頂上に達する。」(J. 379)

(8)「たとえば，あなたもお気づきになっているにちがいありませんが，われらの古きヨーロッパは，とうとう見事なやり方で哲学をするようになり

ましたね。(中略)〈数年経てば警察が現われて，われわれの正しいことを証明するだろう〉。」(50)

見事なやり方で哲学をするようになった，という文章は，『反抗的人間』の「序説」の書きだしを参照すれば，作者の言わんとするところが判然とするのではないだろうか。

「現代の殺人犯は，愛のゆるしを求める，武器を持たぬ子どもたちなどではない。それどころか，彼らは大人であり，そのアリバイは否認できない。つまり哲学がすべてに役立ちうるのであり，殺人犯を裁判官に変えることもできるのだ。」

スターリン治下のソ連や，ソ連の衛星国時代の東欧諸国で行われた粛清裁判を思い起こせば，カミュのこの言説が奇矯なものではないことが理解されよう。サルトルは，粛清や収容所送りなどのスターリン主義的政策を，真の社会主義に到達するための余儀ない廻り道と考えていた。共産(社会)主義国家が警察国家でもあったことはよく知られている。ペレストロイカ以後の最も典型的な警察国家は北朝鮮である。

因みにカミュは，エッセー『夏』のなかで，デカルトの『方法叙説』を「雄々しい詩の中で最も偉大なもの」と呼び，哲学の書とは言っていない。従ってクラマンスが「臆病な哲学者」(52)と呼ぶのは，デカルトの対極に位置する者を指しており，「殺人犯を裁判官に変える」ことのできる人間のことだろう。

(9)「これは謙虚に認めるべきですが，わたしはいつだって虚栄心ではちきれんばかりでした。わたし，わたし，わたし，これがわたしの愛しい生活での畳句で，口をついてでる言葉のすべてのなかに聞かれるものでした。」(53)「つまりわたしは，その日限りの，わたし――わたし――わたしの連続で暮していました。その日限りの女たち，その日限りの美徳あるいは悪徳，犬どものようなその日限りの生活，でも毎日，このわたし自身は，自分の持場をしっかり守っていたんです。」(55)「30年以上前から，専らわが身を愛んできました。」(107)「それがわたしの本質の根底，前にお話した過度の自己愛の結果ではなかったでしょうか。そうです，不死身に

なりたくて死にそうでしたよ。わたしがあんまり，自分を愛しんでいたものですから，自分の愛情の貴重な対象が絶対に消えてなくならないことを望まないわけにはいきませんでした。」(108)「生き方を変えなかったので，相変らずわが身を愛しんでいますし，他人を利用しています。」(147)

このような自己愛の強調が，つぎのジャンソンの言葉に刺戟を受けたことは確実だと思われる。

「君は，君自身のとりこになっている。君の自尊心，君の偉大さ，君の名誉，君という人間像を，気も狂わんばかりに，気にかけているのだ。」(J. 370)

(10)語り手が，オートバイに乗った「痩せた小柄な男」とトラブルを起こす話（56-61）は，どうしてもサルトルとの論争を連想させる。相手が，オートバイ乗りの小男と，彼に味方をする弥次馬の1人だから，合わせて2人であることといい，平手打ちを喰った語り手が，反撃もできずに悄然と自分の車に乗りこんで，不本意にも車を発進させることといい，語り手に少しも非はないのに，あたかも彼を非難するかのように，後続の車がいっせいに警笛を鳴らすことといい，状況としては論争時にカミュが味わったであろう屈辱，不面目と同じ感情を体験したように見えるのである。

オートバイを追いかけて行き，小柄な男を捕まえて張り倒すべきだった，と語り手は悔む。「けれども，もうおそすぎました。だからわたしは数日間，みっともないルサンチマンを抑えつづけたのです。」

この心境は，論争直後のカミュ自身の気持ではなかっただろうか。

「だが，公衆の面前で殴られぱなしになったあとでは，もう自分自身のあの美しいイメージを慈しむことはできませんでした。もしもわたしが，以前に主張していたように，真理と知性の友だったとすれば，こ目撃者の記憶にはもう残っていないあの事件なんか，なにもわたしにはもたらさなかったでしょうよ。つまらぬことで腹を立てたこと，腹を立てたので落着きを失い，自分の怒りに結着をつけられなかったこと，そういうことで自分を責めたりはしませんでした。それどころか，わたしは仕返しをし，相手を殴り倒したくてうずうずしていたのです。まるでわたしのほんとうの

願望が，この世で一番聡明な，あるいは寛容な人間になることではなくて，誰でもいいが，自分のえらんだ敵を，ただもう打ち倒し，ついには力づくで最強の人間になることのようでした。あなたはよくご存じでしょうが，じつのところインテリってのは，誰だって，キャングの一員になり，暴力だけで社会に君臨したくて仕様がない連中なんです。キャングものの小説を読んで信じられるほど，そいつはそんなに容易じゃありませんから，インテリは一般に政治に頼り，一番残忍な政党に走るんです。」

一番残忍な政党とは，この場合は一党独裁制の共産党を指すから，ここで言うインテリとはサルトル一派を指すことは明らかだろう。マルキシズムを絶対視するならば，共産党の一党独裁を容認するのは必然の成行である。

(11)「恐らくわたしは，時には，人生をまじめに取るふりをしましたが，すぐにまじめさ自体の軽薄さが見えてきてしまったので，できるだけ巧みに，自分の役を演じ続けるだけでした。」(92-93)

これは紛れもなく，つぎのサルトルの文章を踏まえている。

「あゝ，カミュよ，きみはなんてまじめなんだ，それとも，きみのお得意の言葉を使えば，なんて君は軽薄なんだ。」(S. 353)

(12)「こうして，わたしは人生の上っ面，ある意味では言葉のなかを進んで行きました。絶対に現実のなかをではありません。」(55)

これはつぎの言葉を受けているのではないだろうか。

「なぜなら君にとっては，すべてが，人間それ自体までが観念にすぎないからだ。」(J. 382)「君がもはや反抗者という抽象観念にすぎないからである。」(S. 353)

(13)話者のクラマンスは，自分が「裁き人で改悛者である」と言い，「裁き人で改悛者」とはなんであるか，説明することを約束しながら，聞き手との最後の会見の日まで，ほとんどなにも明らかにしない。第五夜で，初めて説明らしきことを行うのであるけれども，それは決意の表明とも解釈できるものにすぎない。聞き手のように，クラマンスが事務所にしているレストランバーの〈メキシコ・シティー〉に，ふらりと入ってきた同国人に

むかって，「あなたは背徳者だ，色情狂だ，虚言症患者だ，男色者だ，ろくでなしだ」という具合に罵声を浴びせること，それが〈裁くこと〉であるらしい。

しかしながら，じっさいには，この物語がそうであるように，クラマンスは聞き手に向って，自分がいかに最低の人間であるかを説いてやまない。なぜなら，「わたしが現代人にさしだす肖像は鏡になる」からであり，自分を糾弾すればするだけ，他人を裁く権利が増すからである。かくて順序が逆になって，改悛者に徹すれば，自づと裁き人になってしまう。人間は誰でも無実ではない，というのがこの裁き人の判決であるから，裁かれるのは全人類ということになる。

『転落』には Jugement という言葉が27回もでてくる。これはやはり，サルトルやジャンソンの批判と関係があろう。

「〈君の協力者（ジャンソンのこと）は，人々が共産党と共産主義国家以外のすべてに反抗することを望んでいる〉と，君が書くとき，はっきり言って不快になる。文学者がいると思っていたのに，裁判官が相手だとわかったのだ。この裁判官は，警察の下心ある報告書に基づいて，我々の事件を予審している。」(S. 339)「君がやましさを感じないでいられるためには，人に有罪判決を下す必要がある。一人の罪人が入り用なのだ。君が罪人でないならば，世界の人々がそうだろう。君が判決を申渡しても，世界はじっと押し黙っている。しかし，君の有罪判決は，世界とかかわりを持つと，そのとたんに無効となってしまう。だからいつも判決をやり直さなければならないのだ。君が判決を下すことをやめれば，自分の姿がはっきりと見えるだろう。シジフォスよ，君は有罪判決を下すべく運命づけられているのだ。」(S. 345)「君は誠実でありさえすれば，つまり，誠実であるという意識がありさえすれば，それで充分だと信じている。ところで君にはその意識がある。だから君の栄光が最高の裁判官となって，物事を一挙に解決するだろう。」(J. 371)

⒁「それでもやはり，正義という言葉そのものが，わたしに奇妙な憤慨を起こさせました。」(97)

ジャンソンが執拗にカミュを攻撃したことが思いだされる。

「堂々たる風姿，完璧な美しさを具えた君の役割は，威厳をもって世界と，自分自身の条件とを意味もなくつき合せる正義の人という役割で，静謐な場面と象徴的な立役者たちを必要とするのだ。」(J. 366)「禁欲的な大貴族のあの正義，絶対的正義という時代錯誤的な概念。」(J. 366)「正義の人，純粋な人，孤高の人……。そう，結局ぼくはこのように君を見ているのだ。」(J. 370)

(15)「しかし，突然わたしは，弁護の方法としてアマルガムを勧奨しだしました。」(99)

これもサルトルの文章に対応する。

「ところが，出鱈目も極まれりとはこのことで，ごく最近，君も参加したある集会で，アマルガムという名称でだったと思うが，みんなが告発したあの方法に君が頼っているのだ。ある種の政治裁判で被告が数人いれば，裁判官は訴因をごちゃまぜにし，刑罰を混同することができる。（もちろんこれは，全体主義の国家にしか起らない。)」(S. 340)

(16)「こりゃあ困った。わたしも漂流しています。抒情的になりましたよ。」(104)

ジャンソンはつぎのように言う。

「(『反抗的人間』の）40頁ばかりの末尾の部分で，君の思考が熱烈に自分に押しつけている抒情の濫用……。」(J. 356)

(17)『転落』には，キリストや聖書や教会への言及がしばしば見られる。標題の『転落』には，アダムの堕罪の意味もあり，語り手が自称するジャン＝バチスト・クラマンスという名前は，〈荒野に呼ばわる洗者ヨハネ〉からとられている。しかし語り手がカトリックであるという気配はない。「わたしは口頭弁論でときおり神を引き合いにだしましたが，純粋に言葉の上だけのことでしたのに，依頼人に猜疑心を植付けてしまいましたよ。」(113) とか，錯乱状態のなかで，「自分を父なる神と感じることのなんという陶酔感」(149) 」と言ったりしているが，信仰とは関係ない。ところがジャンソンは，「神が人間以上に際限もなく君の心を占めている」(J.

364）などと見当違いのことを言ったのである。

⒅「わたしは，〈警察への頌歌〉や〈ギロチン讃歌〉を書き始めました。」（98）

これは冗談だと思うが，サルトルたちの言葉には毒がある。

「我々は警視庁にいるのだ。デカ（警官）が歩きまわり，靴が乾いた音を立てる。」（S. 339）「いつもそのような疑惑から始めるという気くばりは，むしろ警察的思考に任せておきたまえ。」（J. 358）

⒆「昔，わたしは一つ覚えのように，自由という言葉をくり返していました。朝食で，バターを塗ったパン切れにも，さらに自由を塗りたくりましたし，一日中自由を噛んでいました。社交界では，自由によって気持よくさわやかになった息を吐いていたものです。わたしに対して異議を唱える者には，誰にだって，この鍵言葉をつきつけました。わたしはこの言葉を，自分の欲望と権力とに奉仕させていたのです。ベッドでは，女友だちたちの眠りこんだ耳に，この言葉を囁きました。自由という言葉は，彼女たちを追いだすことに役立ったんです。（中略）わたしは自由が，シャンペンを飲んで祝う褒美でもなければ，勲章でもないことを知りませんでした。口唇の快を味わうのに持ってこいの，甘味類の箱といった贈物でもありません。ほんとうにそういうものじゃあなくて，自由とはつらい仕事，極めて孤独で，極めて疲労困憊をもたらす長距離競争なんです。（中略）あらゆる自由の果てには判決があります。」（138-139）「でもパリの橋の上で，わたしも自分が自由を怖がっていたことを教えられたんですがね。」（141）

最後の引用句は，サルトル『自由への道』の主人公マチウが，パリのポン＝ヌフ橋上で，「自由とはおれなんだ」という啓示を受ける場面を踏まえている。カミュは，自由を唱導するサルトルが，独裁者スターリンに跪拝するに至った矛盾を衝いているのだろう。論争時にサルトルはつぎのように教示している。

「君が他人の思想を数分間考えてくれたら，自由にはブレーキがかけられないことがわかっただろう。なにが自由にブレーキをかけられるだろう

か。そもそもブレーキをかける必要があろうか。車は，ブレーキを持つように作られるから，ブレーキなしの車があるかもしれない。しかし，自由には車輪がない。脚もなければ，くつわを噛みいれさせる顎もない。自由はブレーキと関係がない。自由にはブレーキが備っているでもなく，いないでもない。」(S. 344)「ぼくは自分の周辺に，すでに隷属させられているが，生れながらの奴隷状態から抜けだそうと試みている自由（複数）しか見出さない。今日の我々の自由とは，自由になるための闘いを自由にえらぶこと以外のなにものでもない。」(S. 345)

あとがき

上述の例は，字句に拘っているという印象を与えるかもしれないが，論争時のサルトルやジャンソン（まわりくどくて，趣旨がはっきりしない）の言説への反撥にとどまらず，サルトル・ファミリーの左翼神聖信仰への反撃が，作品の底を一貫して流れていることを認めないわけにはいかないだろう。

(4)で触れたが，サルトルは，貧乏人を助けようとするならば，全身全霊をあげてこれを行うべしと主張している。サルトル自身が，果して主張通りのことを実践したか否かは一先ず描くとしても，クラマンスが，「自分を愛せずには他人を愛せない」とか，「いつまでも自分を愛しんでいる」と言うのは，人間が完全に無私無欲になれるものかどうかに大いなる疑問を抱いている証拠だろう。

宗教戦争のころ，誰でも自由に入りたまえという，歓迎の辞を掲げた男が，どたどたと入りこんできた民兵に殺されたという話をクラマンスは語っているが，無私に徹したところで，殺されるのが落ちですよ，という皮肉にもとれる。クラマンスが，だからと言って，人は誰でも狼だ，というヘーゲル流の考えをなぞっているとは言えないが，サルトルは，ブルジョワを狼と見，労働者をか弱き羊と見なしている気配が濃厚である。ヘーゲ

ルの論説と階級史観とを結びつけているのだろうか。サルトルが，レストランやバーで法外なチップを弾み，あるいは私財を抛って，パリの毛沢東派を助けたのは，金銭に恬淡であることを示してはいるが，間断なく施しをすることより，自助能力を高めることのほうが，貧しい人々を救う道であることを知るべきだった。

いずれにせよ，サルトルやジャンソンが責めたてたことに対して，『転落』は見事な返答になっている，と言えよう。